

## 第3期第10回講座

311

## 次世代塾

伝える／備える



東日本大震災の伝承と防  
災の担い手育成を目的に、  
河北新報社などが開く通常

講座「311『伝える／備  
える』次世代塾」第3期第  
10回講座は23日、大学生ら

犠牲になつた石巻市の大川  
小を訪れ、犠牲者に黙とう  
児童74人と教職員10人が  
族の話を聞いた。

約70人が石巻、東松島両市  
に出向き、大津波で家族を  
失つた後、震災伝承や被災  
者的心のケアに取り組む遺  
族の話を聞いた。

した。「大川伝承の会」共同  
代表で、6年生の次女みず  
ほさん＝当時(12)＝を失つ  
た佐藤敏郎さん(56)は、津

波で大破した校舎を見下ろ  
す裏山に一行を案内した。  
「この眺めをあの日」とく  
なつた子どもたちの代わり  
に目に焼き付けてほしい」  
と述べた後、「ここまで来  
れば助かつた。ただし、救  
うのは山ではなく、いざと  
いう時の判断と行動だ」と  
強調した。

東松島市で講師を務めた  
「東松島子どもグリーフサ



上校舎を一望できる裏山で備えの大切さを  
訴える佐藤さん。大学生らにグリーフワー  
クを体験させた後、遺族の心のケアを解説  
する菅原さん

遺族の思いを後世に  
震災伝承やケア活動学ぶ

## 受講生の声



同世代の死実感  
災害が日常を襲つたこと、学校で自分と同世代の人々が亡くなつたことを実感しました。津波を前に正常

寄り添いが大切  
防災意識を持つ重要性とともに、被災後の心のケアの難しさを学びました。被災者が主体的に話せるよう

な選択ができるか、難しい判断です。災害は人ごとではありません。学びを今後に生かしたい。(仙台市青葉区・東北大大学院修士1年・横山裕一さん・23歳)

愛知県出身で、東日本大震災はどこか人ごとでした。遺族の話を聞いて自分が防災意識の低さを痛感し

防災意識向上を  
愛知県出身で、東日本大震災はどこか人ごとでした。遺族の話を聞いて自分が防災意識の低さを痛感し

ました。震災を自分事と捉えて意識を高め、被災者の声と被災地の現状を伝えていきたい。(さいたま市・日本損害保険協会・田中泰太さん・24歳)

ポート」代表理事の菅原節郎さん(69)は、当時住んでいた同市野蒜南余景で妻郁子さん＝当時(53)＝、長男諒さん＝当時(27)＝を亡くした。市議だった菅原さんは妻と長男に近所の避難誘導を託し、別の地域で安否確認に当たつた。

「家族が死んだのは自分せいではないか、なぜ自分が生き延びたのか。罪悪感に駆られた」と振り返り、確認に当たつた。

「同じ境遇の遺族のグリークケアに取り組む中で自分も救われた」と述べた。仙台市宮城野区の東北福祉大仙台駅東口キャンパスに移動し、10班に分かれてグループ討議をした。「被災時の選択は大事だが、選択の難しさを感じた」「若い世代がSNS(会員制交流サイト)で、遺族の思いを未来に伝えるべきだ」といった意見が出た。

メモ 311「伝える／備える」次世代塾を運営する「311次世代塾推進協議会」の構成団体は次の通り。河北新報社、東北福祉大、仙台市、東北大、宮城教育大、東北学院大、東北工業大、宮城学院女子大、尚絅学院大、仙台白百合女子大、宮城大、学都仙台コンソーシアム、日本損害保険協会、みちのく創生支援機構。事務局は河北新報社防災・教育室=メール jisedai@po.kahoku.co.jp